冒険者達

うさぎたるもの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冒険者達

【Ｎコード】
Ｎ５４２９Ｑ

【作者名】
うさぎたるもの

【あらすじ】
大人気オンライン・オフラインゲームの話です。
２０１１年　新年早々日本で創られた一つのオンライン・オフラインゲームが世界的に爆発的な人気を得た・・・
そのオンライン・オフラインゲームの名前は冒険者達。
その１プレイヤー起きた異変の物語である

プロローグ

２０１１年　新年早々日本で創られた一つのオンライン・オフラインゲームが世界的に爆発的な人気を
得た・・・

そのオンライン・オフラインゲームの名前は冒険者達。

自由度はかつてないほど高い、世界観は世界大戦が始まる１９１０年に地球全体に突然として現われた
各国に黒い円中であり、一国につきなぜかそれは二十一個としかないが、その黒い円中は一番大きなもので半径十キロは越えるものは必ず一国一つは存在して　三キロ以下のもが２０個であり、その中から
異形の者達が次々と現われてはその国の軍隊がその異形の者達を倒すと異形の者達は【金・銀・銅】
【ダイヤモンド】【石油石】と呼ばれる物があり。特に【石油石】はある手順をふめば本当の石油に
なるという石の形をした石油そのものであった。

その為にそれをめぐって大きな国が小さい国を戦争または吸収合併した国は黒い円中が倍に増えると誰もが思っていたが、それはならなかった。

ルールが存在したからだ、一つの国が所有できる黒い円中は最大で２１個であると、つまりどんなに頑張っても戦争に勝って属国化しても属国化した瞬間に黒い円中は消えてしまうという現象が次々と起きた。

そしてそのルールをした全ての国首相クラスが一ヶ所に集まり話し合いを行う瞬間に世界に後の神と呼ばれる物達がその場に現われてルールを決め手消滅したのだ。

ルールは次の通り

1　冒険者資格を持つ人物はランダムで生まれて、冒険者としてどこの国でもいいので支援教会で登録すれば死亡しても、その登録した場所で再び生き返る事が出来る。

2　だが冒険者の資格を持つ者の出生率は低く、仮に国がその資格を持つ者同士を政略結婚・脅迫結婚
など本人たちが望んで結婚していない時は確実にその子供は資格資質を受け継いでうまれてこないこと。

3　また南アメリカの場所にはエルフ族ハイエルフ族ドワーフ族が既に住んでいて人間族には有効な
種族では有るが奴隷扱いまたはそれに順ずる行為をすれば人間族全ての冒険者の資格・冒険者の資質を持つ者は2度と生まれなくなる。

4　冒険者同士の同意による結婚で生まれる子供も冒険者の資質を受け継ぐのは確立的には二分の一になるということ。

5　冒険者を拉致・洗脳・脅迫した国は黒い円柱が一つ消滅する、そして冒険者達は基本何所の国にも属さずに黒い円柱に潜る資格を得る。ただし潜った国には冒険者達は利益の半分を渡すことを義務づけられる。

6　冒険者が罪を犯した時は基本的にはその国の法律で裁く権利を

得る、その為に殺人を犯した
冒険者だとしても死刑にされるこの時は2度と蘇ることなく冒険者は普通の人と同じで生涯を終える。

七冒険者達も不老不死ではなく　一般人と同じで年を取り死亡する。
これが神々が人類に与えたルールで有った、無論これから二百年が経過した時代がプレイヤー達の舞台となる。

つまり普通のオンライン・オフラインゲームでは年をとり死んでいくゲームは存在しなかったが
このゲームではリアル感を増すためにワザとリアルと同じで年をとるゲームにしている。
また子供システムも一つの魅力であった。

当たり前だ気が有った人とリアルのように結婚してその子供は確実に冒険者となってある程度のＬｖとスキルを子供が覚えた状態である年齢に達すると参加できる仕組みだったのだ

ただしＮＰＣと結婚した時は資質は二分の一の確立でしか受け継がれないだがそれは確実に天才・鬼才と呼ばれる特殊スキルを有しており。

普通にＬｖ１から2上げるには１００の経験地が必要だと仮定すると
天才スキルは７５でＬｖ２に昇格するだけではなく、ステータスも二倍に上がる
鬼才スキルは５０でＬｖ２に昇格するだけではなく、ステータスは五倍に跳ね上がる。

だがこれは一部の隠しスキルとなっており普通に冒険をしているだけは絶対に取れないスキルだったりする。

こうした色々なやりこみ要素がある為に人気が爆発的になっていまにいたる。

一話目

このゲーム最大の楽しみは種族の多さと職業の多さである

ハイエルフ族　エルフ族のまとめる役目を持つエルフの王族　エルフの里ではアイテムなどの値段は半額になるが一部の職業につけないが寿命が就きる事はない

エルフ族数多くいるエルフ族で基本後方型の職業に着く事が多い種族こちらも一部の職業につけないが
寿命はない　エルフの里に大抵はいる

ハーフエルフ族　人間族とエルフの間に生まれたハーフであり寿命があるがこちらは最大で３０００年
職業はエルフが就けなかった一部の職業も就けるがエルフの里での買い物の値段が最大で１０％多く
上乗せさせられる

ダークエルフ族　エルフ族が闇に堕ちた時になる種族でエルフ族全体から嫌われ者である
エルフの里に入るには一部の特殊のクエストをクリア後にもらえるエルフの里の通行許可書を入手して初めてエルフの里に入れるが
エルフの里で買い物をする時には買い物の値段が通常価格の三倍はする。　全ての職業につける　寿命がないがやはり多くのデメリットを有している一族である。

ドワーフ族　腕力・体力・器用はどの種族より一番高いが寿命は最大で五百年生きる事が出来るが

やはり此方も一部の職業に就けない。

人間族　一番地球では種族の数が多い為に勢力として一番ではあるがどの職業も就けるが魔力を持って生まれてくるものと持たない者が生まれる為種族であるが寿命は最大で１００年。

次にソロ用に用意されたパートナーシステムである最大人数五人までＮＰＣキャラを創れて
自らの味方として一チームだけ作れるだけの人数が完成する。

これは人数制限があるクエスト・イベント系が多く存在している為に大抵のプレイヤーはこれを使っている、ただしパートナーシステムで作られたキャラの最大Ｌｖは９０００までしか上がらない。
プレイヤーは最大で１００００００まで上げることが出るき為にこの名前のシステム名が作られた由縁である。

そして戦闘職業だから

ファイター・戦士・騎士・黒騎士・聖騎士・勇者・侍・マスター侍・忍・マジックナイト
アーチャー・ガンナー・マジックガンナー・スナイパー・コマンド・キャプテン
ランサー・竜騎士・侍・マスター侍
魔法使い・魔導師・賢者・マスター魔法使い・魔法戦士・召喚師
僧侶・坊主・賢者・呪い使い・術者・召喚師
モンク・格闘家・坊主・聖騎士・レンジャー
シーフ・盗賊・大海賊・海賊・山賊・大山賊・レンジャー

以上の職業があるが中には色々とかぶっている職業が幾つもあるがこれはその職業から別の職業へと

転職が可能な事を示しているのだ。

では通常の職業は鍛冶屋・商人・使用人・貴族・王様など本当に数が多いのだ。
だからこそ人気が出たのだ。

それに一番の人気はやはり小規模戦闘・中規模戦闘・大規模戦闘の三種類である

まずは小規模戦闘だが、これに参加する最低Ｌｖは１０～３０００の間まで参加可能である。
そして最終地点にはボスがおりそのボスを倒すことでそのチームまたはプレイヤーはレア度が高いアイテム・アクセサリー・装備品が手に入り尚且つ経験地も手に入るという

初心者プレイヤーの登竜門である、ただ小規模戦闘の敵の数は最低でも１００体～３０００体までおり
ある程度の連帯をしないと絶対に無理な使用になっているがそれでも簡単な方である

次に中規模戦闘はプレイヤーの参加Ｌｖは最低で３０００～５０００の間でこちらもやはり敵の数は５００体～５０００体の間で出てくる上にやはり最終地点にはボスキャラが存在する、他は小規模と一緒だが中規模はネタ系装備品が多い上にそのネタ系装備品がまた通常の装備品・レア武器より強い装備品だったりする

最後に大規模戦闘だが、これは上の二つの小規模戦闘十回勝利・中規模戦闘１０回勝利の二つの条件と
プレイヤー参加Ｌｖ６０００～１００００の間で行われる。

だがこの条件をクリアしているプレイヤー達は以外に少ないそれはＬｖ３０００まで比較的に楽にＬｖが
上がりやすい環境が整っているお陰である、これは陣営側が用意したトラップでもあり

しかも大規模戦闘だけは不定期で行われる、二つの条件をクリアした上で様々国・村・町のＮＰＣキャラから色々な情報を入手して初めて大規模戦闘の場所が明かされてるシステムとなっている為に中々これがプレイヤー泣かせなのだ。

情報を入手してその場所に向かったが既に大規模戦闘の期間は過ぎていたなんて良くネットの掲示板に上がっている話題だ、しかもボスまでたどりつけたプレイヤー・チーム組みがいないという点である
当たり前だ敵のＬｖは最低でも５０００以上はある敵が最低で６０００～最高で１００００の数の暴挙で
プレイヤー達に襲いかかるのだ、しかもその上ボスがいる為に完全に消耗戦を覚悟しないといけない
戦闘なのだ。

だがそれでも大規模戦闘が続けられるのはそれは超越者と呼ばれる種族に慣れる一点に関わる
これはプレイヤー限定ではあるが、大規模戦闘をクリアした者達だけは超越者となって寿命が消える上に現状のステータス三倍上がる上に超越者の資格を得てどの職業も無条件で変更できる点と大規模

に参加していた時に装備していた装備品・アクセサリーが数値が二倍に跳ね上がり武器破壊・武器に設定されている消耗値が消えて、武器が半永久的に壊れないという特典があるからだ。

だがここに大規模戦闘をクリアしたチームが現われたそれはプレイヤーの数は３５名と中堅クラス
チームでは有ったがそれでもなんとかクリアできたのはこのチームはこの大規模戦闘をクリアする為に作られたチームである為にチームメンバー全てがＬｖ１００００・パートナーは９０００で装備もアイテムも充実していたのだ。

だが陣営側もボスと用意していたまたかドラゴン族の最大級強さを持っているゴールドドラゴンが倒されるとは思ってもいなかったはずだ。

なぜと思えるがこのゲームではドラゴン族は全てのダメージは１０％減スキルを有しているのだそれの最大級の強さは全てのダメージ５０％減というとんでもないスキルを持っていたのだ。

つまり大規模で仮に最中地点に着いたチームが居たとしてもだかなり消耗しているプレイヤーキラーとして要していたドラゴン族が倒されたのだから驚くなというほうがどうかしているのだ。

ちなみにそのチームも本当にぎりぎりで次のドラゴンのターンで一撃を入れられたら全滅を覚悟していたほどＨＰゲージは完全に赤でピンチ状態だった。ＭＰゲージもパートナーも仲間も使い切っている奴が多い上に回復魔法も一回使えればいいほうだった、そこまでの死闘の末に勝利したチーム名ハロウィンである。

そのチームの中の一人で　サトシ・アイズ種族人間　聖騎士　サクラ・アイズ　種族ハイエルフ　賢者
セイラ　種族　ハーフエルフ族　魔法戦士　エルザ　種族ダークエルフ族　召喚師　ハート　ドワーフ族　職業　坊主　ファンネル
エルフ族　魔導師　のパトーナシステムを含めた六名だが

超越者になれるのはプレイヤーキャラのみよって３５名の超越者達がこのゲームに誕生したのだ。

と同時にサトシの種族が変更が超越者となった瞬間にそれは起きた、パソコンの画面が完全にフリーズしたのだ。

「なんだよ、いきなりフリーズしたのか？　折角クリアしたのにまっあデータは陣営側に記録はあるし再起動しても超越者に違いないし」

だが幾ら弄ってもパソコンの画面が全然変わらない再起動掛けても画面はフリーズしたまま、
最終手段でパソコンの主電源を切った瞬間にパソコンの画面から突然まぶしいほどの光が部屋中に広がり・・・その光が消えた瞬間にそのプレイヤーは部屋から突然と姿を消していた。

それと同時にパソコンの画面は完全に消えるこれはそのパソコンの主電源をこの部屋の持ち主が消した為に起こった事でごく普通に起きた事であった。

ただ一ついえることは３５名の超越者持ちのプレイヤー達がこの世

界から消えたことは確かである。

その３５名の主役を獲た世界はようやく動き出し始める、舞台に上がった事未だに知るよしないプレイヤー達が一体なにをするのかはそれはこれから物語はゆっくりと動き始める。

１０００年後の世界？？？

パソコンの前にいた男性は奇妙な光が消えた時、自分はなぜか自分がこのゲームで作ったはずのキャラのコスプレをした状態でどこかの村の宿屋にいたのだ。

その為に暫くは落ち込んでいたが、やはりそこは元々プレイヤーであるのだ現状把握で自らのステータス画面を開けてみると。

サトシ・アイズ　種族超越者　職業聖騎士　Ｌｖ１００００　所持金一億円　アイテムボックスは

殆どからの状態だった、これは仕方がないボス戦後に種族変更後にこの世界につれて入ってしまったのだ。

だが金もあるがここで一つの疑問があったそれはＬｖ表示の隣に次のＬｖアップまで１０万と書かれていたことである。

『このゲームはプレイヤー最大Ｌｖ１００００までしか上げられなかったはず、これが超越者の裏スキルと考えるなら・・・ある意味うれしい誤算だ』

裏スキルこれは鬼才・天才とか呼ばれるスキルも含まれる通常の条件では絶対に手に入らないスキルやイベント限定で手に入るスキルの事を指す。

「だが今は情報がほしい。もし仮にあのゲームの続きとしてもチー

ムメンバーにも連絡は取れない上にどこの村か町かは分からない場所だ、だとすると情報を得るためには宿屋か酒場か」

こうして聖騎士の格好をした人物は村を歩きまわり３０分後ようやく宿屋に到着した。

どうやら小さい村のようで宿屋と酒場の二つを同時に行っている場所のようだ。

「一晩宿を頼みたい」

「いいよ、部屋は沢山空いてるからね、ただし前金で３，０００はもらうよ」

『この手の宿では格安か、ゲームではこのクラスの宿でも最低は５０００は軽く越える宿は沢山有ったがそれでももんだなく初心者でも泊まれたのは魔物達が落す者が金目の物に変換出来たし今の所持金なら問題はないか』

「いいぞ、３，０００だ確かめてくれ」

千円札三枚をだしてそれを女将に渡すと、女将は多少驚いた表情をしたが直ぐに何事もなかったようにサトシに部屋の鍵を渡してくれた。

「ほらよ、これが部屋の鍵だ」

「２０２号室か」

あとはゆっくりと二回への階段を上り２０２号室の鍵を開けてひと段落して今ある情報を整理する。

「問題はちゃんと日本円は使えたがなぜか女将は驚いていた、つまりは日本サーバーは今も存在しているが日本円を使う冒険者達が極端に減ったかまたは日本は既に魔物の攻勢で滅亡したかどちらかか？」

冒険者達のゲーム内でも国家の耐久度が存在しているのだ、これはそれぞれの国が軍隊を持ち小規模・中規模・大規模戦闘に冒険者達が全く参加しなかった時には国の軍隊が魔物の群れを撃退するシステムだったが、これにも欠点がある軍隊は消耗するのだ、そして軍隊の戦力ゲージが０になった瞬間にその国でもう一度小規模・中規模・大規模の戦闘のどれかが発生した時には問答無用でその国は滅亡する。

だからこそこのゲームは人気が有った自分達の活躍によって国の存続に関われる、これほど楽しいシステムはないのだから、ユーザーが増えるのは当たり前だ。

「だからこそ解せないか、日本円は使えるし滅亡していたらその国の紙幣は十分の一の値段の効果しか
発生しないし、日本は滅亡はしてないがこのお札が使われるのは珍しいか、どうなっているんだ？　ゲーム中に取り込まれるしその上自分のアバターになっているは、今はわけがわからんから寝るか」

なんとも簡単な思考を持った人物と考えるが、時刻は既に午後６時過ぎなのだこれもステータス画面に元々付けてあったゲーム内の時計で時間が分かるからなんとかなるが。

だが毎回毎回目をつぶってステータス画面を確認する作業はある種大変だ、他の人からみたら多段に目をつぶっているかそれとも瞑想している風にしかみえないが、ゲームではいつでもステータス画面を見れたがこれから先は大変なことになるとようやくサトシも分かった上でこのまま眠りについた。

普通に早いのではと考える人もいるが色々な事が起きすぎて精神的に完全にまいっている状態ではいいアイディアも思いつかないし妥協案もでない。ならば問答無用で寝た方がはるかにいいのだ。

たとえそれが現実逃避だとしても。

そして次の日、朝の食事の為に女将に食事を頼んで本当に閑散としてる一回の宿の一つの席にサトシは
座りため息をついていた時に。

女将は朝ごはんを持ってやってきてくれた。

「朝が食んだよ・・・ん・・・聞いているのか？　あんたは？　そんなりして聖騎士の塔を目指している冒険者と見えるけどあれはやめておいた方がいいよ、聖騎士の塔は確かに誰でも入れるけどその前には聖騎士の難問があるんだよその問題を解いた人だけが入れる仕組みだから最近は塔への挑戦者達がめっきり減ったものさ」

『なんかこちらが現状確認している最中にも勝手にこの人はしゃべているがどうやら自分は聖騎士の塔へ上る挑戦者と勘違いされているようたが・・・だが人がなぜゲームの世界に入り込んだが悩んでいるのに良く喋る人物だな』

「それにね、何でも１０００年前に起きた魔物達の大規模な行動を止めた伝説の冒険者チーム【ハロウィン】に所属していた人達の中に聖騎士がいたようでね、その伝説にあやかってこうしてあんたみたいな人達相手になんとか商売が出来る村なんだよ」

『なるほど・・・どうやらここはゲームの世界では２０１０年のはすが女将から獲た情報では１０００年後未来の世界か、本当にどうするか、ここは言葉を合わせてみるか？　他にも情報が聞けるかもしれないし』

「そうですね、確かに聖騎士の塔がこの近くにあるのは分かっていたんですが、何所の場所にあるか分からなかったので今から近くにある大都市・都市に戻る予定なんですよ　折角大見得切って出てきたのにはっあーーーどうにかなりませんかね？」

これを聞いた女将はある確信をえたそれは他にもこうした冒険者達を幾人も見てきたからだ。

「それは仕方がないよ、あんたは未だに試練すら与えられない実力者ということさ、まっあせる必要はないよ、ほらこれがこの辺の地図だ、どうだ聖騎士の塔の場所は書かれてないだろう」

たしかに塔の場所はその女将が見せてくれた地図に何所にものって

ないのである。

「たしかに地図にかかれてない、あれほど有名ならなぜ地図にのらないんだ」

確かにサトシの疑問はあるはそれは簡単な話だ。

「それはね、聖騎士の塔はある種の魔法結界が半永久的に働いていて、結界が自動的に塔に入るのを識別するだよ、それの結果で不合格者達は塔へと近寄れない、また合格者達も塔へ入って出てきたあとの記憶しかないんだ、だからこそ地図には何所にその塔があるかは分からないんだよ、ただこの近くにあるのは確実なんだよ」

「そうでしたか・・・それと大変申し訳ありませんが、この周辺の地図も売ってくれません、塔へ行く途中の戦闘でどうやらなくしたようでこのままでは都市・大都市へ行くことも出来ないんだ」

「そうかいそうかい、それでこの村に止まったのは確かにこの村からある程度道なりにいけば都市にいけるんだけど、地図がなければ危ない場所もわからないからね、特に魔物が縄張りが書かれている場所の地図なんて都市部クラスのギルドでなければ売ってないしね、この村にも都市に行くだけの地図はいくらか予備はあるからいいけど　次からは気をつけなよ聖騎士になりそこねたボーズ君」

こうして女将に残りの宿代と地図代合わせて５０００円を支払いサトシは地図をは手に入れた事で
ここら一体の正確なマップが出来たのだ、実際にゲームでも地図を手に入れてないとマップは自らの足で歩いて埋めるシステムなのだ

これは魔物の現われる場所で戦闘が起こり地形が幾度と変わっている上に現実世界のように衛星システムでいつでも地図が見れるシステムはないのだ。

世界大戦が起こらなかった世界では世界の技術Ｌｖはある程度低くなっている、戦争は人の持つ全ての技術Ｌｖを上げる事が出来ると誰かが言っていたが実際にはそうである、この世界では戦車はなんとか出来ている状態で航空機開発は夢のまた夢である飛行船が未だに現役で空に飛んでいるのだからその技術Ｌｖは押して知るべし。

そうしてなんとか村から出たサトシは目立つ聖騎士装備を変更して皮の鎧・皮の篭手・皮のブーツ鉄の盾とロングソードとなんとも貧弱な装備であったが、これはの村に売ってあった装備を買い揃えた為に起きた現象だ、ではなぜと思う人もいるが目立つのだ聖騎士の装備は純白に近い鎧・篭手・ブーツ・盾・剣では自分は聖騎士ですよアピールしている状態である。

これでは駄目なのだ今は情報を集める時の為にファイター装備で今のサトシでも十分であるただてさえ
Ｌｖは１００００でなのだその殆ど敵は一撃倒せる攻撃力をゲームでは有していたが、ゲームの世界ではどうなるかわからない為に他の冒険者達に駆け出しと思わせる必要があった故の偽装装備である。

また元の装備アイテムボックスの中に存在している、このアイテムボックスは異空間に存在しているというぐらいしか分からない、実際に目を閉じてステータス場面からアイテムボックスを選択すると勝手にでてくるのだから原理は分からなくもて使えるのだから問題はない。

こうして一日前まではゲームのプレイヤーであった人物が今はゲームと思われる世界にいる不思議を感じながら都市を目指して歩いてく。

登録完了

問題がいくつも発生していた、それは外国サーバーへ移動するポーターと呼ばれる転送装置が使えなくなっていたこと、これはどうやらゲームがより快適に遊べるように創られたシステムであり。

「現実では使えないか・・・それに地図を見る限り近畿地方の一角であり兵庫県相生市、たつの市、赤穂郡上郡町の境に位置する山付近であることもなんとか分かったがいいが、リアルと近い殆ど人間の手が入っていない山道付近を歩くのは辛い」

事実三濃山がまだ見える上に村から出て三日目のキャンプ中だからな、どおりであのおばちゃんが

「乗り物をもっていないならキャンプ道具一式は必要だよ！！！」

というはずだ、

「バスもないし自転車もないでは・・・歩くの辛いぞ、しかも乗り物は馬車か馬だしな、自転車はあるらしいけどそれも大都市にしか売っていないとは」

最も地図の上では既にサトシは目的の都市まで一日分あるけばだどり着ける場所まで近づいてたのだ。

最もそれは後でしることになるが。

「さて休憩は終ったしまた歩くか、いのししモドキ・ヘビモドキ・猿モドキに襲われる前に」

このモドキもモンスターの一種ではあるが通常のモンスターは倒すと何かしらのイゴットを落して消えたり、そのモンスターが装備していた装備品を落すことがあるが、このモドキモンスターだけは倒しても実体を保ったままその場に残る特性を持つ為に。

特オーストラリア大陸・ユーラシア大陸等ではこのモンスターを倒す依頼が多いのはトラ・ゾウなどもモドキがいる為に普通に動物達の乱獲をしなくてもその動物が持つ角や毛皮が簡単に手に入る上におまけにモンスターである為に誰にも迷惑はかからないとという性質を持つ為に、ゲームでもやはり

外国サーバーではモドキモンスターの狩りイベント・依頼が多かったのだ。

「最もそのお陰でいのしし鍋やヘビの皮・猪の角などが手に入るわけで飢える必要はないけど、味が・・・」

実際にモンスターである以上は本家の人間が食べれる動物達より肉の質が落ちているのは仕方がないが
それでも毒はないのでキャンプセット道具さえあれば冒険者達は比較的この肉を使っているのが現状だ

無論ちゃんとした肉も都市では売っているが冒険者達は基本何日もダンジョンやこうした場所ですごしたりするのであんまり意味はな

いのだが。

そうしているうちにようやくサトシも村から出て五日目に美濃都市へ着いた。

「ついた・・・まさか、ここまで時間がかかるとは思わなかったたしかおばちゃんの言うことではギルドマークは両端に剣が２本ありその中央に天使があるマークだったな」

他にも鍛冶屋のマークとか１０００年もたてば変わっていて当たり前である。

「でもまさか冒険者ギルドのマークも変わっていたとは・・・もしかするとチーム制度も消えている可能性は高いかな、どちらにしてもギルドにいかないことには確認の仕様もないか」

こうしてサトシは都市を歩き冒険者ギルドを探していたが、結構比較的簡単に見つける事が出来た。

「というか・・・ここまでデカイ施設とは・・・やはり冒険者達をまとめている日本支部の施設の一つではあるか」

高さが４０ｍもあり建築面積が１５，４００ｍ?もある建物である　早い話が大阪ドームの半分の規模が施設になっているのだ、驚くなというほうが無理あるだろう。

「ちっとまて・・・あれほどデカイのに中身しょぼい！！！　なんだこれは病院の待合室をただ単にでかくしただけかよ！！！」

サトシの声の大きさにびっくりした他の冒険者達がいたが、直ぐにその反応は消えていくつの冒険者と思えるグループ達はそのサトシの反応を見て。

『『『『『『なんだ・・・冒険者に志願しに来た素人か』』』』』

誰だって冒険者になるにはこの施設に入る必要があるその為にこの反応は誰もが通るある種の儀式的なものであり、笑う冒険者達はいない、自分たちも一般人から冒険者として登録してする際に同じ反応わ示したのだから。

この反応で大体は分かる冒険者かそうでない者かの違いを、一般人でも今のご時世であればある程度の武装等はしているこれは都市・村から出る時に野良のモンスターがまれに襲ってくる為の処置であるからだ。

その為にサトシが最初に居た村にも自衛団ではあるがそれなりの武装とモンスター相手の経験を持つ一般人がいたのだ。

無論そんな人の為にそれぞれのカウンターが分かるように大きな看板が書いてある。

登録所・依頼所・クエスト所・蘇生所と分かれて書かれていたから結構楽に見つける事が出来た。

「ここだな登録所は・・・あの・・・冒険者になりたいんですけど、登録等の説明は此方で聞けるんでしょうか？」

カウンターの女性にサトシは聞くと。

「はい、登録は出来ますが、素質がないことに登録は不可能ですそれは分かってくだいね、時々登録の時に自分の祖母・母方・父方が冒険者だったもの血筋を引いているから確実に自分も冒険者だと勘違いする人がいてその人達も中には資質を持っている人はいますが大抵は資質無しの人がいますので、登録が出来ないわかって暴力等を私達に振るうのはやめたほうが賢明ですよ、確実に冒険者の人達や我々の警備の手のものが止めますから」

『なるほど・・・そういうからくりがあるのかでも逆に暴れた人が居たから出来たシステムとも言えるか』

「はい分かりました、ではどうしたらその登録を出来るのでしょうか？」

『実際にゲームでは簡単に登録は出来る、ソフトを買い、メールアドレス・パス・アカウントを設定すればゲーム会社から登録完了のメールが来てそれで遊べるシステムなのだから、だがここではゲームとは違うのでやり方を聞いておかないと後々大変なことになるのは明白というか二次元でも登録とかしてない主人公がどのようなことになるか大抵は書かれているからな』

そんな事を思いながらサトシは受付嬢の女性から話を聞いていた。

「では最初にこの水晶に手を置いてください、資質持ちで魔力持ちの方ですと紫色に変わります。資質持ちで魔力なしの方は赤・資質無しの方は黒色に水晶が変わります」

『なるほどそうして資質ありと無しでわけるのか、やりやすいシステムだな、目に見える色を使っているしこれでは抗議が出来ないシステムになっているのか』

「・・・分かった、これだな」

ポゥーーー

色は当然紫色である聖騎士になれば魔力無しでもＬｖが上がる後とに魔力が徐々に加わっていくのだ。
聖騎士の技の一つに【パラディンクロス】というアンデット族のグループに大ダメージを与える技が魔力を消費して使う為にサトシには魔力が備わっていると水晶が反応しただけなのだが。

そんなことを知らない受付嬢の女性は驚いていた、実はこれ人間で資質持ちで魔力持ちは生まれは百人に一人という確立で生まれる為に非常にその数が少ないのだ。

普通の人は資質持ちで魔力なしの人が多いのだ。

「では・・・これで・・・貴方様は資質あり・・・魔力ありと言うことで・・・冒険者になれますが、その説明も聞きますか、聞かれて冒険者にならないという人もいるので」

「いいです、説明を聞きます、話してください」

「了解です、では冒険者になるのは簡単ですこの後にそれぞれの職業別に話をしますが最初になれるのは初期職業と呼ばれるファイタ

ー・アーチャー・ランサー・シーフ・モンク・魔法使い・僧侶だけです
勘違いする人もいますが簡単に上級職の一つである聖騎士や魔法戦士などに慣れませんそれぞれの職業になる為の塔へ上りそこで上級職へ転職をはたします、また次冒険者は不死とされていますがこれも違います、今から九百年前に冒険者の不死が消えてどの職業でも合計で五回死ねば蘇生所に運び込んでも蘇生は出来ません。ただ例外として千年前に現われた超越者と呼ばれる人達だけは不老不死であるというこは聞いています、ただどのような条件でそれになれるか現在確認されている超越者ただ一人の方が
口を摘むんでいる為に分かりませんがそれでも冒険者になりたいでしょうか？」

受付嬢がこうした説明をするのも仕事の一つだ、ただ自分が受け持った人達が条件を知らずに死んでいくなど精神的にも受け入れない為にこうした説明がよく見られる事がある。

「いいです、その条件で」

元々の計画通りにファイター志望でいいかなほかの職業だと実力がバレる可能性があるし。

「ではどの職業にしますか、貴方様は魔力持ちの資質なのでどの職業でもいけますが・・・見た目で分かりますファイター志望でよろしいでしょうか？」

「はいそれでお願いします」

「ではお名前を承りす」

「サトシでお願いします」

受付嬢も名前だけで冒険者登録ができるようなので問題なしに登録が完了していく。

「それではこれを受け取りください」

そうして渡されたのは黒いカードで名前と職業が書かれているだけである、体力・運・魔力・経験値・素早さ・筋力が書かれていたがそれは全て0を刺していたが・・・

ポゥーーー

一瞬カードが光に包まれると次にそのカードには様々な事が書かれていた。

「これで完全に本当の意味で冒険者としての登録が済みました、そのカードは資質を持つ人が持てばその人の現在の数値を数値化してくれるという代物です。それが冒険者の方には身元を示す身分証の変わりになるのでなくさないでください、ではここに新たな冒険者の誕生祝福します」

こうしてサトシはこの世界で冒険者としの身分を手に入れる事が出来た。

登録完了（後書き）

サトシのステータスは後ほど明かします

能力紹介

サトシの元々ステータスです

聖騎士　Ｌｖ１００００　【次のＬｖアップまで残りの経験値１０万】

体力６０００／６０００

魔力３０００／３０００

力１０００／１０００

素早さ２０００／２０００

防御力　５０００／５００

攻撃力　３０００／２００

装備品　ロングソード攻撃力１５０／１００→　野営と野良モンスターモドキにより耐久力と攻撃力が減少中。

皮の鎧防御力１００・皮の篭手防御力２０・皮のブーツ防御力３０・鉄の盾防御力５０を装備中

手に入れたアイテム　地図一式・キャンプ道具一式　猪モドキの肉一ｋ・猪モドキの角×２　ヘビモドキの皮×５　猿の毛皮×２　冒険者カード【黒色】

ファイター　Ｌｖ１　【次のＬｖアップまでの経験値は残り２００】

【力を全て封印した状態でのステータスです】

体力　１０００／１０００戦闘・修行・Ｌｖアップ・体力を使う技・奥義で変動あり

魔力　２００／２００　Ｌｖアップ・戦闘・修行・魔法の使用・

魔力を使う技で残り魔力の変動あり
力　１００／１００　マジックアイテム・Ｌｖアップで変動あり
素早さ　３００／３００　Ｌｖアップ・重い武器・防具を着ける事で変動あり
防御力　５００／５００　Ｌｖアップ・防御力も防具の損傷度で変動あり
攻撃力　２００／１５０　Ｌｖアップ・攻撃力は武器の消耗度で変動あり

流石にチートでは色々と不味いので封印がされています。
最もこれでもファイターの中では結構基礎の能力は高いほうです、通常の人間のファイター志望の人ではこれのステータスの３分１も満たしていれば初心者クラス【Ｌｖ５】までならファイター同士の戦いではファイターの初心者クラスの人が勝ちます。

それを普通に越えている能力を持っているサトシなので通常ならファイターＬｖ１５クラスに相当しますそれでも冒険者としては登録所に登録されてる資料では【初心者】レベルと表示されています。

能力紹介（後書き）

ようやく悩んでいたステータスを書き終えました。

次からはようやく再び本編が始められます。

またこの小説の感想などはどんどん受け付けています　良い小説にしたいので。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5429q/

冒険者達

2011年10月5日21時46分発行